



カウンセリングルームだより

Vol. 30 (2010年12月発行)

『出産』をテーマにしたドキュメンタリー映画が2本11月6日から公開されていますのでご紹介します。

監督たちは今の日本に何を伝えようとしているのでしょうか？

豪田トモ監督〈37歳〉『うまれる』

監督自身が親から愛された記憶がなかった。結婚したものの、夫となることも家族を持つ意味もわからなかったことが結婚生活の破綻につながっているのでは…。答えを求め、誕生をテーマにした映画製作を決めた。流産や死産に苦悩する人の多さ、不妊治療の現場、女性にとって「産む」という行為が持つ意味とは何か？妊娠、出産だけが『うまれる』ではないと気づいた。そして、親になった人たちの姿を見て、「自分もちゃんと愛されていた」と確信できた。

物語

《両親の不仲、虐待の経験から親になることに戸惑う夫婦》

妊娠6カ月の妻は、初めてのお産が楽しみな反面、様々な不安も抱えている。幼いころに母親から虐待された辛い経験を持つ。なぜ自分は母親に受け入れられなかったのか？いまだに母親との関係が消化できていない。夫は幼いころから両親の不仲を見てきたため、父親になるという実感が持てず、妻のお腹の子は「自分たちの副産物」でしかない。戸惑い、悩みながらも出産に向けて準備を進めていく。

《出産予定日に我が子を失った夫婦》

出産予定日に突然お腹の中で亡くなった。深い悲しみの中で自分たちを責め続ける日々を過ごしていた夫婦を救ったのは、「わたしがあなたを選びました」という本の著者で、ある産婦人科医との出会いだった。

《子どもを望んだものの授からない人生を受け入れた夫婦》

日本でも有数の不妊治療クリニックで管理部長をしている47歳の女性。自身も30代の時9年間の不妊治療を受け末に、子どものいない人生を受け入れた。焦燥感などから精神的に不安定になる妻を夫は包み込もうとしている。クリニックには中絶を選択する女性たちも訪れ、複雑な気持ちにさせる。妊娠できない年齢になった今でも心の整理がつかない彼女は、まだ5つの受精卵を大切に保存している。

《完治しない障害を持つ子を育てる夫婦》

医学の発達によって18トリソミーという障害を持って生まれた子ども。18トリソミーは染色体異常による重い障害で、うまれること自体が難しく、うまれても90%以上の子どもが1年以内に亡くなる。妊娠8カ月の時そのことを知った夫婦は、迷わず産むことを選択した。そして、子どもは数カ月の入院後奇跡的に病院を退院し、家族との生活が始まった。いつ終わってしまうかわからない命と向き合い、全力で生きる姿に励まされながら一日一日、子育てを楽しもうとしている。

河瀬直美監督〈41歳〉『玄牝(げんぴん)』

あるがままに、命と向きあう女たちの美しきドキュメンタリー愛知県岡崎市で自然なお産に取り組んでいる産科医院が舞台。それぞれの事情や想いを抱える妊婦たちと、その様子を見守る家族や助産師の想い、そして生まれることなく消えてゆく命とも向き合う医師の葛藤。現代に生きる私たちの強さと脆さがないまぜとなっている。

(プログラム、ポスター、書評等より)

12月・1月のカウンセリング予定日

12月4日、11日、18日(不妊学級)、25日

1月8日、15日(不妊学級)、22日、29日

